

乳がん女性の支援ニーズの改善のための協働ケア介入の実行可能性と再発不安・脅威の評価尺度日本語版の信頼性・妥当性および関連要因の検討

著者	牧野 香苗
号	88
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	医（看）第3号
URL	http://hdl.handle.net/10097/00126297

氏 名	まきの かなえ 牧野 香苗
学 位 の 種 類	博士 (保健学)
学位授与年月日	平成 30 年 9 月 25 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 2 項
最 終 学 歴	平成 8 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科保健学専攻修士 課程修了
学 位 論 文 題 目	乳がん女性の支援ニーズの改善のための協働ケア介入の実行可能性と再発不安・脅威の評価尺度日本語版の信頼性・妥当性および 関連要因の検討
論文審査委員	主査 教授 宮下 光令 教授 佐藤 富美子 教授 石田 孝宣

論 文 内 容 要 旨

我が国における乳がんは女性の罹患率、死亡率において最も高い疾患であり、生活様式の欧米化により今後さらに増加することが予測されている。乳がんサバイバーにとって主要な心配事のひとつに再発に対する不安・脅威があり、支援ニーズが報告されている。しかしながら、先行研究における支援ニーズを改善するための介入方法は効果を示すことができていない。また、我が国では再発不安・脅威を評価する信頼性・妥当性が検証された評価尺度が存在しない。がんの再発不安・脅威の関連要因として問題解決能力との関係が明らかになれば、介入方法として問題解決療法の有用性が提示できる。したがって、研究目的は、①乳がん女性の支援ニーズについて協働ケアモデルに基づいた介入を開発し実行可能性を検討する、②乳がん女性の再発不安・脅威を測定する評価尺度日本語版の信頼性と妥当性を検討する、③乳がん女性の再発不安・脅威と問題解決能力との関連を明らかにすることである。

再発不安・脅威を反映した支援ニーズの高い対象として、手術後の乳がんサバイバーのうち、外来で化学療法または内分泌療法を受け、精神・心理的苦痛のスクリーニングにより一定以上の苦痛がある女性を対象に、問題解決療法および行動活性化療法を基にした看護師と精神腫瘍医、腫瘍医の協働ケアプログラムを開発し実行可能性を検討した。その結果、適格基準を満たした 59 人の乳がん女性のうち 40 人が研究参加に同意し 37 人が介入プログラムを最後まで継続できたことから、研究参加率 68%、完遂率 93% となり良好な結果が得られた。介入の効果に関する予備的な検討では、主要評価項目である支援ニーズに有意な改善がみられた。しかしながら、副次的評価項目のひとつである Concerns about Recurrence Scale (CARS) の再発不安・脅威の頻度・程度は協働ケア介入前後において有意な差は得られなかった。

乳がん女性の再発不安・脅威を評価する尺度として CARS の日本語版を順翻訳、逆翻訳のプロセスを経て作成し、乳がんの手術後無再発で外来通院中の女性 432 人に対し自記式調査を実施し、367 人の回答を分析した。因子分析の結果、4 項目で構成される「再発不安・脅威を経験する頻度・程度」は原版と同じ構造を示し、内的一貫性、併存妥当性、弁別妥当性が検証された。一方、再発不安の内容を示す 26 項目は原版と異なる「死と健康に対する心配」「女性らしさに対する心配」「自分らしさに対する心配」「役割に対する心配」の 4 つの下位尺度が同定され、高い内的一貫性を示したが、併存妥当性、弁別妥当性についてはさらなる検討が必要であった。原版との因子構造との違いは、日本人と欧米人の死生観の違いなど文化差を反映していると考えられ、我が国に特異的な尺度であることが推察された。

CARS 日本語版と精神的苦痛(うつ・不安)を従属変数とし問題解決能力との関連を重回帰分析した結果、関連要因を調整すると問題解決能力のうちネガティブな問題志向が CARS 日本語版の各下位尺度および精神的苦痛と有意な差があった。がんの再発不安・脅威と社会的問題解決能力が有意に影響していたことから、介入方法として問題解決療法が有用である可能性が示された。その一方、社会的問題解決の下位尺度のひとつである「合理的な問題解決」が必ずしも再発不安・脅威を軽減していなかったことは、適応的な行動の結果と考えられ、介入が必要となる乳がんサバイバーを同定できるカットオフポイントの必要性が示唆された。

以上の結果より、支援ニーズの高い乳がん女性に対し問題解決療法と行動活性化療法を用いた看護師と精神腫瘍医、腫瘍医の協働ケア介入が、実行可能であることが確認された。乳がん女性を経験する再発不安・脅威の評価尺度 CARS 日本語版については、再発不安・脅威を経験する頻度・程度は内的一貫性、構造的妥当性、仮設検定により信頼性と妥当性の一部が確認できた。問題解決能力との関連ではネガティブな問題志向が再発不安・脅威を高めている可能性が示された。今後は、再発不安・脅威の評価尺度である CARS 日本語版について、本研究で確認できた信頼性と妥当性の内容に加えて、2 時点の調査を行い再テスト法による信頼性、反応性、解釈可能性を検討することにより、介入へのアウトカム指標となるよう検証を重ねていくことが重要である。そして、乳がん女性の支援ニーズおよび再発不安・脅威の緩和を目的とした協働ケア介入が、無作為化比較試験により有用性が証明される必要がある。

審 査 結 果 の 要 旨

博士論文題目 乳がん女性の支援ニーズの改善のための協働ケア介入の実行可能性と再発不安・脅威
の評価尺度日本語版の信頼性・妥当性および関連要因の検討

受付番号 18A-4 氏名 牧野 香苗

我が国における乳がんは女性の罹患率、死亡率において最も高い疾患であり、生活様式の欧米化により今後さらに増加することが予測されている。乳がんサバイバーにとって主要な心配事のひとつに再発に対する不安・脅威があり、支援ニーズが報告されている。しかしながら、先行研究における支援ニーズを改善するための介入方法は効果を示すことができていない。また、我が国では再発不安・脅威を評価する信頼性・妥当性が検証された評価尺度が存在しない。がんの再発不安・脅威と関連要因として問題解決能力との関係が明らかになれば、問題解決療法による介入方法の有用性が提示できる。

これらの背景から、本研究の目的は、①乳がん女性の支援ニーズについて協働ケアモデルに基づいた介入を開発し実行可能性を検討する、②乳がん女性の再発不安・脅威を測定する評価尺度日本語版の信頼性と妥当性を検討する、③乳がん女性の再発不安・脅威と問題解決能力との関連を明らかにすることとした。

「①乳がん女性の支援ニーズについて協働ケアモデルに基づいた介入を開発し実行可能性の検討」に関しては再発不安・脅威を反映した支援ニーズの高い対象として、手術後の乳がんサバイバーのうち、外来で化学療法または内分泌療法を受け、精神・心理的苦痛のスクリーニングにより一定以上の苦痛がある女性を対象に、問題解決療法および行動活性化療法を基にした看護師と精神腫瘍医、腫瘍医の協働ケアプログラムを開発し実行可能性を検討した。その結果、適格基準を満たした 59 人の乳がん女性のうち 40 人が研究参加に同意し 37 人が介入プログラムを最後まで継続できたことから、研究参加率 68%、完遂率 93%となり良好な結果が得られた。介入の効果に関する予備的な検討では、主要評価項目である支援ニーズに有意な改善がみられた。この結果から、今回開発したプログラムは実行可能であり、支援ニーズの減少に関して潜在的な有用性を有することが示された。今後は無作為化比較試験による有用性の検討が必要である。

「②乳がん女性の再発不安・脅威を測定する評価尺度日本語版の信頼性と妥当性の検討」では Concerns about Recurrence Scale (CARS) の日本語版を作成し、乳がんの手術後無再発で外来通院中の女性 432 人に対し調査を実施し、367 人の回答を分析した。因子分析の結果、4 項目で構成される「再発不安・脅威を経験する頻度・程度」は原版と同じ構造を示し、内的一貫性、併存妥当性、弁別妥当性が検証された。一方、再発不安の内容を示す 26 項目は原版と異なる「死と健康に対する心配」「女性らしさに対する心配」「自分らしさに対する心配」「役割に対する心配」の 4 つの下位尺度が同定され、高い内的一貫性を示したが、併存妥当性、弁別妥当性についてはさらなる検討が必要であった。原版との因子構造との違いは、日本人と欧米人の死

生観の違いなど文化差を反映していると考えられ、我が国に特異的な尺度であることが推察された。CARS 日本語版の信頼性・妥当性に関しては再テスト法による信頼性の検討、反応性、解釈可能性など一部課題を残すものの、今後のわが国の乳がんサバイバーの再発不安・脅威に関する研究の1つのエンドポイントが作成され、この領域の研究が確実に次のステップに進むことが期待される。

「③乳がん女性の再発不安・脅威と問題解決能力との関連の検討」に関しては、CARS 日本語版と精神的苦痛（うつ・不安）を従属変数とし問題解決能力との関連を重回帰分析した結果、関連要因を調整すると問題解決能力のうちネガティブな問題志向が CARS 日本語版の各下位尺度および精神的苦痛と有意に関連していた。がんの再発不安・脅威と社会的問題解決能力が有意に影響していたことから、介入方法として問題解決療法が有用である可能性が示された。その一方、社会的問題解決の下位尺度のひとつである「合理的な問題解決」が必ずしも再発不安・脅威を軽減していなかったことは、適応的な行動の結果と考えられ、介入が必要となる乳がんサバイバーを同定できるカットオフポイントの必要性が示唆された。これらの結果は今回、副次的エンドポイントであった再発不安・脅威に対して潜在的な有用性を示せなかった「①乳がん女性の支援ニーズについて協働ケアモデルに基づいた介入」方法の更なる洗練に活用できる。

これらの一連の結果はわが国の乳がんサバイバーに対する再発不安・脅威を減少させ、QOL を高めるための支援の予備的検討を終えたものである。今後の CARS の信頼性・妥当性の確立、支援ニーズに基づいた協働ケアモデルの洗練と無作為化比較試験の実施などに更なるエビデンスの確立つながる成果であり、本論文は博士（看護学）の学位論文として合格と認める。

学力確認結果の要旨

審査委員出席のもとに、学力確認のための試問を行った結果、本人は医学に関する十分な学力と研究指導能力を有することを確認した。

なお、英学術論文に対する理解力から見て、外国語に対する学力も十分であることを認めた。